PH-2-34

精神科デイケアにおける成人発達障害プログラムの導入と実践
Introduction and implementation of adult developmental disorder programs in psychiatric day care

○朝倉起己 (OT)[1)]，須藤明日香 (NS)[1)]，豊田佳子 (CP)[2)]，久留宮なぎ砂 (OT)[3)]，藤松昌子 (OT)[4)]
[1)]共和病院地域ケア課，[2)]臨床心理科，[3)]リハビリテーション課，[4)]作業療法課

Key words: 精神科デイケア，発達障害，エンパワメント

1．はじめに

発達障害特性を持つ者（発達障害者）は年々増加しており，知的遅れのない自閉症スペクトラムでは生活のしづらさを感じながら成人期に至るケースが多いと言われている．また地域において障害児通所支援事業所（障害福祉サービス）は複数あるものの多くが高校生までが対象であり青年期から成人期における支援が充実しているとは言い難く，発達障害者への支援のニーズは高い状況である．

そこで，発達障害者の課題である日常生活に必要なコミュニケーション技能の向上を精神科デイケアで改善を図り，発達障害者同士の思いや悩みを共有できる機会を設けるために当院にて成人発達障害プログラム（プログラム）を導入・実践したため報告する．なお，本報告は所属機関の倫理審査委員会の承認を得ている．

2．準備と導入

当院の精神科デイケア部門（地域ケア課）には発達障害者支援の経験やknow-howが少なかったため，当院の児童発達外来担当者や当院PBST（Positive Behavior Supports Team：積極的行動支援チーム）の協力を得て2023年11月に多職種（医師，公認心理士，看護師，精神保健福祉士，作業療法士）によるプロジェクトチーム発足．月に2回の会議にて①プログラムの意義や運用案，②費用対効果の検討，③プログラムを実践している施設の見学等を行い，2024年3月から広報および対象者のリクルート，プログラムの演習と見直しを行い，同年6月にプログラムを正式稼働した．

3．プログラム概要

隔週土曜AMに開催（1クール全6回）．対象者は9名（男6名，女3名，年齢20～42歳，疾患は全員F84）．担当職員は7名（地域ケア課員4名とプロジェクトチーム3名）．プログラム目的は①人との交流を楽しむ，②身体を動かしてリフレッシュする，③自分自身の特性を知る，④自分に合ったコツを学ぶとし，具体的な内容は①はじめの会(近況報告)，②主活動（ストレッチ，風船バレー，調理実習，特性についての話し合い），③茶話会，④おわりの会（連絡事項）とした．

4．プログラムの運営・結果

常時6～8名の参加があり，「運動や調理実習などグループで取り組むことができ貴重な体験だった．同じ特性を持った方の話を聞くことができ励みになった．発達障害特性の話は少し重かったけど自分の特性を見直したり工夫していることを知れたのは良かった」等の感想が挙がり，最終回のアンケートでは「皆の意見や工夫が参考になり自分もやってみようと思った．自分の意見に「わかる」と言ってもらえてほっとした．人の役に立て協力できたと感じて嬉しかった．自分の特性に改めて気づき振り返ることができた」等の声が挙がった．

担当職員からは「発達障害特性を踏まえた関わり方や環境設定を実践で学べた．プロジェクトチームの協力があってこその盛会であり，今後も発達障害特性に関する学習機会やロールプレイがより必要」等の意見が挙がった．

5．考察

水野は，デイケアでの支援は発達特性の軽減を目指した「治す医療」ではなく，互いの多様性を認め社会へ適応していくための「治し支える医療」であり長期的な経過をたどる発達障害には適しているのではないだろうかと述べている．対象者の感想や意見から，本プログラムは日常生活に必要なコミュニケーション技能の向上や発達障害者同士の思いや悩みを共有できる機会となっており，ねらいは概ね達成できたと考える．今後も発達障害者のエンパワーに繋がるよう実践力を高めていきたい．

<引用文献>水野健 他：精神科デイケアにおける発達障害プログラムの紹介．デイケア実践研究27（1）：18-24．2023